

国見温泉

Living with a volcano for a neighbor

92 歳になる宗一さんのお母様を含む 3 世代の森一家が敷地内に暮らす国見温泉は、いかにも家族経営らしい雰囲気があります。森一家は、1 年のうち春から秋を山の上で過ごし、冬は山を下って盛岡で過ごすという独特の暮らし方をしています。これはのどかな話に聞こえますが、秋田駒ヶ岳は火山活動が活発な山であり、前回の噴火が 1970 年 9 月から 1971 年 1 月にかけて起こったことを忘れてはいけません。

「当時、私は中学生でした」と宗一さんは振り返ります。「当時は避難とか噴火場所から離れることに関するルールはありませんでした。それどころか、噴火が起こった時、この山では国体（の登山大会）が開かれていて、重り入りのザックを背負った登山者が山道で競争していたんです！」食堂にあるアルバムには、10 代の宗一さんが秋田駒ヶ岳の噴火をそう離れていない場所から楽しそうに眺めている写真が収められています。

火山の噴火ほど深刻ではないものの、国見温泉が日常的に直面している課題は、その非常に珍しい緑色の温泉水の硬度の高さへの対応です。宗一さんは、湯のミネラル成分の堆積によってパイプが破損するのを防ぐため、週に一度すべてのパイプを徹底的に洗浄し、温泉の利用客が支障なく入浴を楽しめるようにしています。「木片でパイプを叩いてこびりついた堆積物を剥がし、それを真水で洗い

流します」と宗一さんは言います。早朝にお風呂に入ると、水面に白っぽい膜片を目にすることがあるかもしれませんが、これは手で湯をかき混ぜるだけで簡単になくなります。